

シオン園 ボランティア里親会会長

長曾我部明照さん



ちょうそかべ・ひろあき 1930年生まれ、新生区在住。元・新生区公民館館長。趣味は人の世話と花の手入れ。「最近
は去年生まれた初めてのひ孫に夢中」だそうです。

里子が一時的に一般家庭を体感できる日本で唯一の活動を行うボランティア里親会。会の会長を務める長曾我部さんは、20年間、夫婦で何人もの里子を受け持ってきました。

定年退職後、世話好きが高じて「住んでよかったと思われ
るまちづくり」に奮闘。民生委員や公民館活動を精力的に行い、公民館発のデイサービスなど多くのユニークな活動を展開してきました。そんな長曾我部さんが里親になったのは、当時の児童養護施設シオン園の山下二行園長から「家に帰れない子どもたちのために何かできないか」と、相談があったからです。それから、授業参観や小旅行、家庭で食卓を共にすることなどを通して、長曾我部さんは里親として楽しみながら子育てをしてきました。

また、真摯に子どもたちと向き合うことで、問題が起きても必ず誰かが助けてくれました。「何事においても頑張っていれば見ていてくれる人はいるんですよ」と、微笑みます。

初めのころは「子どもたちの寂しさや悲しみを埋めてあげたい」と、思っていた長曾我部さん。しかし、いつしか子どもたちのいい生活が考えられないように、「おいしい物を食べたとき、綺麗な景色を見たとき、子どもたちにも経験させてあげたいと思うようになりました」と、目を細めます。

「園を巣立った子どもたちが社会に出て頑張ってくれていることが一番うれしい」と、話す長曾我部さんにとって大人になった里子からの近況を知らせる手紙は宝物です。

退職後の活動のおかげで、仕事一筋だった現役のときより格段に視野が広がったという長曾我部さん。「生きがいである人との関わりを大切にしながら、元気な限り、子どもたちを見守り続けたい」――長曾我部さんは周りの人に支えられ、これからも歩み続けます。



1. 若き日の長曾我部さんと山下さん(左から) 2. 公民館活動の一つとして「近所で買い物をしたい」という高齢者の声から始めた「朝市」は10年以上続いています。 3. シオン園では子どもを家庭に引き取る通常の里親も募集しています。 4. 長曾我部さんの所属する「花遊び会」によって荒尾駅の待合室に展示された生け花。同会会員による生け花教室もシオン園で行われています。